

[B年]復活節第6主日(2026年5月10日)**【旧約聖書日課】創世記 18章23～33節**

²³アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか。²⁴あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお救しにはならないのですか。²⁵正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」²⁶主は言われた。「もしソドムの町に正しい者が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を救そう。」

²⁷アブラハムは答えた。「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。²⁸もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを滅ぼされますか。」主は言われた。「もし、四十五人いれば滅ぼさない。」²⁹アブラハムは重ねて言った。「もしかすると、四十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その四十人のためにわたしはそれをしない。」

³⁰アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう少し言わせてください。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「もし三十人いるならわたしはそれをしない。」

³¹アブラハムは言った。「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、二十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その二十人のためにわたしは滅ぼさない。」

³²アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずに、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれません。」主は言われた。「その十人のためにわたしは滅ぼさない。」

³³主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の住まいに帰った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章22～27節

²²被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。²³被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、目に見えないものを望んでいる

なら、忍耐して待ち望むのです。²⁶同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。²⁷人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 16章12～24節

¹²言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。¹³しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。¹⁴その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。¹⁵父が持つておられるものはすべて、わたしのものである。だから、わたしは、『その方がわたしのもを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

¹⁶「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」¹⁷そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。」¹⁸また、言った。「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」¹⁹イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。²⁰はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。²¹女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。²²ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。²³その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言っておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。²⁴今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 18章23～33節

23アブラハムは進み出て言った。「あなたは本当に、正しい者を悪い者と共に滅ぼされるのですか。24もしかすると、あの町の中には正しい人が五十人いるかもしれません。その中に五十人の正しい人がいても、その町を赦さず、本当に滅ぼされるのでしょうか。25正しい者を悪い者と共に殺し、正しい者と悪い者が同じような目に遭うなどということは、決してありえません。全地を裁かれる方が公正な裁きを行わないことなど、決してありません。」26主は言われた。「もしソドムの町の中に五十人の正しい者がいるなら、その者のために、その町全部を赦すことにしよう。」27アブラハムは答えた。「塵や灰にすぎない私ですが、あえてわが主に申し上げます。28もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれません。それでもあなたはその五人のために、町全体を滅ぼされるのでしょうか。」すると主は言われた。「もしそこに四十五人いるとすれば、私は滅ぼしはしない。」29彼はなおも重ねて主に語りかけて言った。「もしかすると、そこには四十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その四十人のために、私は何もしない。」30彼は言った。「わが主よ、こう申しあげてもどうかお怒りになりませんように。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「もしそこに三十人いるなら、私は何もしない。」31彼は言った。「あえてわが主に申し上げます。もしかすると、そこには二十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その二十人のために、私は滅ぼしはしない。」32彼は言った。「わが主よ、もう一度だけ申し上げても、どうかお怒りになりませんように。もしかすると、そこには十人しかいないかもしれません。」すると主は答えられた。「その十人のために、私は滅ぼしはしない。」33主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムは自分の住まいに帰って行った。

ローマの信徒への手紙 8章22～27節

22実に、被造物全体が今日に至るまで、共に呻き、共に産みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています。23被造物だけでなく、霊の初穂を持っている私たちも、子にさせていただくこと、つまり、体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。24私たちは、この希望のうちに救われているのです。現に見ている希望は希望ではありません。現に見ているものを、誰がなお望むでしょうか。25まだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは忍耐して待ち望むのです。

26霊もまた同じように、弱い私たちを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せない呻きをもって執り成してくださるからです。27人の心を見極める方は、霊の思いが何であるかを知っておられます。霊は、神の御心に従って聖なる者のために執り成してくださるからです。

ヨハネによる福音書 16章12～24節

12言っておきたいことはまだたくさんあるが、あなたがたは今それに堪えられない。13しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれる。その方は、勝手に〔直訳→自分から〕語るのではなく、聞いたことを語り、これから起こることをあなたがたに告げるからである。14その方は私に栄光を与える。私のものを受けて、あなたがたに告げるからである。15父が持っておられるものはすべて、私のものである。だから、私は、『その方が私のものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

16「しばらくすると、あなたがたはもう私を見なくなるが、またしばらくすると、私を見るようになる。」17そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたは私を見なくなるが、またしばらくすると、私を見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。」18また、言った。「『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」19イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたは私を見なくなるが、またしばらくすると、私を見るようになる』と、私が言ったことについて、論じ合っているのか。20よくよく言っておく。あなたがたは泣き悲しむが、世は喜ぶ。あなたがたは苦しみにさいなまれるが、その苦しみは喜びに変わる。21女が子どもを産むときには、苦しみがある。その時が来たからである。しかし、子どもが生まれると、一人の人が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。22このように、あなたがたにも、今は苦しみがある。しかし、私は再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。23その日には、あなたがたが私に尋ねることは、何もない。よくよく言っておく。あなたがたが私の名によって願うなら、父は何でも与えてくださる。24今までは、あなたがたは私の名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

- ・5月10日「復活節第6主日」の日課主題は「」。
- ・旧約日課は、「創世記」から、族長アブラハムがゾドムの町のために執り成しをする説話箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「霊」の執り成しについて教える箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「真理の霊」の来臨を告げる箇所。

旧約日課(創世記 18章より)

- ・「創世記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第一巻に置かれた歴史物語文書。「天地創造」から始まる「原初の物語」(1~11章)と、「アブラハム」から始まる四代の家族を描く「族長の物語」(12~50章)に分けられ、そのうち「族長の物語」は前半の「アブラハムの物語」(12~25章前半)と後半の「ヤコブの物語」(25章後半~50章)に分けられる。さらに「ヤコブの物語」を前半の「ヤコブとエサウの物語」(25章後半~36章)と後半の「ヤコブの息子たちの物語(ヨセフ物語)」(37~50章)と分けることもできる。
- ・日課箇所は、「アブラハムの物語」の中で、最初の跡取り候補であった甥のロトが移住していた町ゾドムが滅びに向かっていることを知らされたアブラハムが、町の救いのために主に執り成し願った説話の後半部。通例、「アブラハムの執り成し」として解されるが、実際に物語られる内容は、執り成しではなく、悪に対する裁きとして滅びを告げる主に対してアブラハムがその正当性を問うというもの。対話形式で「神の正義」のあり方を問う神学的叙述と見ることもできる。
- ・日課箇所を含むこの説話全体(18:16~33)は、「アブラハム物語」の展開上、前段(18:1~15)で描かれる「三人の旅人の来訪とイサク誕生の予告」に接続した場面となっている。アブラハムは、三人の旅人をもてなした後、彼らを見送るために一緒に出かけて行き、その途上でおもむろに「主」の告げる裁きの言葉を聞かされる(17~20節)。この「主」は、厳密に読解すれば三人の旅人(「その人たち」とは別の存在として登場していると解せるが、通説では、旅人の一人が「主」だったと解されてきた。つまり、前段でアブラハムが迎えた三人の旅人は、そもそも「主」の一行だったと解釈されてきた。それは、前段でアブラハムとサラが対話する相手が「主」として描かれたり、後段(19:1以下)でゾドムに到着する者が「二人の御使い」とされており、三人のうち一人であった「主」だけはアブラハムとの対話の後に「去って行かれた」(33節)ためだと解されたことにもよる。
- ・このような展開を考慮すると、18~19章は、「アブラハム物語」で当初跡取りと目されていた甥ロトが、正妻サラの子イサクの誕生によって完全に排除されることを描くために、彼(ロト)の求めた町ゾドムの悪が滅びに値するものであったことを強調すると共に、「主」の憐れみをなお示すための章句として解される。

使徒書日課(ローマ 8章より)

- ・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。使徒パウロが、未訪のローマ教会共同体に宛てて、自身のローマ訪問計画をあらかじめ伝え、またローマ訪問後に画策している 에스パニア伝道計画への協力を求めるために記した。
- ・本書でパウロは、ユダヤ人と異邦人の違いを超えた普遍的な神の救済計画があることを示すことに大部を費やしている(1~11章)。背景には、パウロ自身のこれまでの経歴の中で一時、使徒ペトロらを中心とする主流派指導者との間での意見の不一致から独自の宣教活動を展開したことがあった(使徒 16~17章、ガラテヤ書など参照)ことを踏まえて、現在は主流派と一致しうる福音理解に立っていることを示す必要があると考えていたことがあったと推認される。また、それに加えて、なお一部で対立含みとなっているグループとの間でも一致しうる神学的根拠を彼が持ち合わせていることを示す意図もあったと推認される。
- ・日課箇所を含む8章は、「神の霊」の授与がすべてキリストに結ばれた者に共通の「神の子」という自己理解を付与するものであるということを示した上で、「霊」によって「神の子」として完成させられる希望を福音として告げようとしている。信者個々に対する「神の霊」の授与は、初代教会において、「イエス・キリストと結ばれる洗礼」に伴って起こることと解されていたと推察されるが、それは洗礼を受ける教会が宣言することによって確証されるものとなっていたと考えられるが、これには異論もあったと推認される。パウロは、客観的な確証として、キリストと結ばれた者が神を「アッバ、父よ」(ロマ 8:15)と呼ぶことができているという事実のみを示し、これで十分であるとしている(ガラ 4:6にも同様の主張)。「アッバ、父よ」と神に呼びかけることは、福音書で示されるように、主イエスが弟子たちに教えた独自性の強い信仰習慣の一つと考えられ、この呼びかけを共有することが主イエスおよびその弟子たちの教会と一致した自己理解を形成する役割を果たしていたことは間違いない。
- ・23節でパウロは、「神の子とされること」を「体の贖われること」と言い換えている。「贖い(アポリュトローシス)」は、「代価を払って自由にする」と、「解放」(ルカ 21:28)、「釈放」(へブ 11:35)とも訳される。「新約」全体でも「パウロ書簡」全体でも、この用語の用例は多くない(名詞形→新約 10例、内パウロ 7例)。他方で「体(ソーマ)」の用例は多く、特にパウロは独特の用法でこの語を用いており、本書簡などでは、「キリストの体」という表現等と共に「復活」理解の鍵語として用いている。この「体」の用法から、「体の贖い」はキリスト者自体の「復活」を意味することで、その「復活」の結果として完成するのが「神の子」としてのあり方であると考えているものと推認される。これを、パウロはすでに始まり、いまだ完成していないこととして示そうとしている。

福音書日課(ヨハネ 16 章より)

・日課箇所は、主イエスが最後の晩に弟子たちとの対話を通して示されたこととされる教え(13~16章)の一部で、終盤に差し掛かった箇所。この一連の教えは、「洗足」の出来事に続いて弟子たちと共に食事をした後に、ご自身の離別と喪失を告げることから始まっている(13:31~33)。

・そこでも示されているように、本福音書全体で、主イエスがどこを目指して行こうとされているのか、という問いは中心的な主題である。その行く先をユダヤ人たちは知ることができず、弟子たちも理解できないうちにおり、主イエスを見失うことになると、この一連の教えの中でも繰り返し告げられるが、同時にこの教えの中では、「しばらくすると…見るようになる」とも告げられ、日課箇所では、これが弟子たちにとっては謎かけのように受けとめられている様子が描かれている。

・端的に、弟子たちの視点から、主イエスは十字架の死へと向かわれたことによって、そこに伴い従うことができなかつたという事実がある。しかし、この出来事が、一連の教えの冒頭で「栄光を受けるとき」とされているように、単純な離別や喪失ではなく、むしろ弟子たちにとっても特別な出来事として迎えらるべきこととして認識されている。主イエスが「栄光を受ける」と言われるように、弟子たちにとってもそのときに「栄光を受ける」ようなときとして迎えらる、ということである。そのことを、日課箇所では主イエスは、ご自身の十字架死のような殉教として示すのではなく、超自然的な昇天(携挙)による栄化として示すのでもなく、弟子たち自身が「主イエスの名」によって天の父に願うことができるようになることとして示されている(23~24節)。

・主イエスが弟子たちに示されているのは、ご自身の十字架死を通して、彼らのご自身と一体化し、天の父とも一つとされる交わりに入るようになる、ということで表現される救済の道筋である。本福音書では、一貫して主イエスが御子として天の父と一つであることが主張されているが、弟子たちとの間には大きな溝がある。しかし、主イエスの十字架死の後には「真理の霊」が与えられ、御子と天の父との一つの交わりに弟子たちも加えられることになる、というのである。

来週の誕生日 (5月10日~16日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-224「われらの神、くすしき主よ」(= I-73 番「くすしきかみ、たえなる主よ」)は、17世紀ドイツ改革派牧師で敬虔派の影響を受けて讃美歌創作をしたJ.ネアンダーの作詞。曲は、この歌詞を自身の歌集で発表する際にネアンダー自身が指定して掲載した曲(作曲者不詳。ネアンダーの自作?)。
- ・21-476「あめなるよろこび」(= II 150 番)は C.ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475

番 = I 352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

- ・21-531「主イエスこそわが望み」(= I 358「こころみの世にあれど」)は、8世紀頃のアイルランドの修道院に遡るとされる古いアイルランド語讃美歌で、20世紀初頭に英訳されたアイルランド民謡集に収録されてから英語圏で広く讃美歌集に採用されるようになった。『讃美歌 21』では英語3節版に基づいて改訳されている。

21-224「われらの神、くすしき主よ」

Wunderbarer König

1. Wunderbarer König, Herrscher von uns allen, / laß dir unser Lob gefallen; / Deines Vaters Güte hast du lassen triefen, / ob wir schon von dir wegliefen: / Hilf uns noch, / stärk uns doch; / laß die Zungen singen / laß die Stimmen klingen.
2. Himmel, lobe prächtig deines Schöpfers Thaten, / mehr als aller Menschen Staaten. / Großes Licht der Sonne, schieße deine Strahlen, / die das große Rund bemalen; / lobet gern, / Mond und Stern, / seid bereit zu ehren / einen solchen Herren!
3. O du meine Seele, singe fröhlich, singe! / singe deine Glaubenslieder; / was den odem holet, jauchze, preise, klinge; / wirf dich in den Staub darnieder! / Er ist Gott / Zebaoth! / Er nur ist zu loben, / Hier und ewig droben.
4. Hallelujah bringe, wer den Herren kennet, / wer den Herren Jesum liebet; / Hallelujah singe, welcher Christum nennet, / sich von Herzen ihm ergiebet. / O wohl dir! / glaube mir: / endlich wirst du droben / ohne Sünd ihn loben!

21-476「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.

21-531「主イエスこそわが望み」

Be thou my vision

1. Be thou my vision, O Lord of my heart, / be all else but naught to me, save that thou art; / be thou my best thought in the day and the night, / both waking and sleeping, thy presence my light.
2. Be thou my wisdom, be thou my true word, / be thou ever with me, and I with thee Lord; / be thou my great Father, and I thy true son; / be thou in me dwelling, and I with thee one.
3. Be thou my breastplate, my sword for the fight; / be thou my whole armor, be thou my true might; / be thou my soul's shelter, be thou my strong tower: / O raise thou me heavenward, great Power of my power.
4. Riches I heed not, nor man's empty praise: / be thou mine inheritance now and always; / be thou and thou only the first in my heart; / O Sovereign of heaven, my treasure thou art.
5. High King of heaven, thou heaven's bright sun, / O grant me its joys after victory is won; / great Heart of my own heart, whatever befall, / still be thou my vision, O Ruler of all.